

国語科学習指導案

平成25年 1月 5日
中学1年対象
指導者 小淵 邦夫

1, 題材名「俳句づくり」

2, 考察

(1) 教材観

国語科の目標は、学習指導要領によって「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」と示されている。しかし、目標が抽象的な言葉で表現されていることもあり、実際の自らの授業を鑑みると、目標に近づけるための実際の学習場面を具体的にイメージすることが難しいという反省がある。また、インターネットや携帯電話等の普及により言葉の伝達手段は大変便利にはなったが、生徒が具体的な言語活動の中で言葉そのものと向き合い、日本語の奥深さや多様性を感じ取る機会はますます乏しくなっていると感じている。

そのような中で、「俳句づくり」を定期的に学習することを通して、表現力、理解力、思考力、想像力、言語感覚といった目標で示された概念をより具体的にとらえさせることができ、また日本語の持つ奥深さや多様性を実感させることができ、強いては、国語を尊重する態度の育成にもつながると考えている。

以下、「俳句づくり」を通して生徒に身に付けさせる知識・技能、育む思考力等、養えると考ええる意欲等について述べる。

①俳句づくりにおける基礎的・基本的な知識・技能

「俳句」にはきまりがあり、そのきまりは「有季定型」と言われている。有季とは、季節を示す言葉（季語）を読み込むことであり、定型とは、5・7・5の17音のことである。俳句は、万葉集以来の短歌（和歌）の上の句（5・7・5）の部分が、言語表現としての長い変遷を経て、江戸時代の初めに松尾芭蕉によって、文学的表現として定着した「短歌」と双璧をなす日本独自の短詩型文学である。

3年間の「俳句づくり」を通して、目標で示された表現力、理解力、思考力、想像力、言語感覚といった漠然とした概念を具体的にとらえさせたいと考えており、そのためには次のようなことを身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能であると捉えている。

○俳句という17文字で表現する創作を通して

- ・自分が想ったことや考えたことを、自分が有している語彙の中から選び焦点化して表現することの表現の仕方。
- ・自分が焦点化し表現したい中心となる自分の想いや考えを、読み手が言葉から受け取る物事の心象を想像する見方・考え方で表現することの表現の仕方。
- ・自分が表現したい中心となる想いや考えを、言葉と言葉の結びつきを工夫し、他者が読み取れるように5・7・5という定型における表現方法を活用する表現の仕方。

②俳句づくりを通して育む思考力・判断力・表現力等

有季定型という制約のなかで、自分の思い（主題）を表現する上記のような表現の仕方を身に付ける創作活動を通して、次のような思考力・判断力・表現力等を生徒自ら育むことができると考える。

ア、視点を絞り込む力

どこに視点を当てるか、また、5・7・5の17音という制約の中で、表現する事柄を焦点化する力と共に、焦点化した事柄を自分で考え選んだ言葉で明確に表現する表現の仕方を通して表現で

きる力を育む。これは、文章構成を基本とした一般的な文章を書く場合、その基本ともなる「前書き」における「書こうとする事柄の視点を絞る」ことにもつながる大切な力であると考えている。

イ、想像力

事象からうけた印象を5・7・5の17音で表現する創作の中で、想像した世界を言葉で表現するために自分の語彙の中から、ふさわしい言葉を考え選ぶ、言葉のつながりを考え、表現の仕方を工夫することを通して、想像を膨らませ、言葉の奥にある想像世界が読み手に伝わるような表現する力を育む。

ウ、言語感覚

季語を含めた俳句の創作活動を年間継続することで、自分が抱いた驚き、喜び、悲しみ悩み等を5・7・5の17音に託して表現することを積み重ねることにより、日本語を用いて自分の思いを俳句として言葉で表現することを考え表現を工夫する中で、表現する力と共に、5・7・5という韻の表現を通して日本語への言語感覚を育む。

エ、表現力

○5・7・5の17音という制約の中で、例えば最初と最後の5音を入れ替えて、全体の言葉のあり方を考えるなど、自分が受けとめた印象を言葉で表現する仕方を通して、表現する力と表現しようとする力を育む。

○俳句をつくり、自作の俳句を相互に比べ合い鑑賞し合い、表現された言葉について意見を出し合い交流することを通して、より次元の高い表現と表現しようとする力を育む。

当然、ア・イ・ウのような観点で表現できる力も、この表現力に含めて考えている。

③関心・意欲・態度

ア、季語をいれた5・7・5の17音の表現のあり方に関心を示し、進んで俳句づくりに取り組む。

イ、自作の俳句を作り、作った俳句を皆で鑑賞し合い、自他の作品の良さを確認し認め合うと共に、よりよい表現の仕方を相互に求め合う俳句づくりに取り組む。

ウ、日々の生活の中で、折に触れて自分の心に響いた事柄や事象を俳句で表現しようと、意欲的に創作に取り組む。

エ、完成した俳句は、俳句を募集している各種機関へ応募し、作品の評価をしてもらうことを通して、学習の成果を確認すると共に、次の俳句創作への意欲の向上を図る。

(2) 生徒の実態

最近の生徒の会話を聞いていて、言葉の奥にある意味を感じとらせる表現が実に浅く単純化されてきていると感じている。例えば本人にとっていいことがあった場合、「嬉しい」と言う。その程度が甚だしければ「とても嬉しい」や「すごく嬉しい」もしくは「ちょう嬉しい」などと表現している。その嬉しい内容が、人の優しさや思いやりを感じさせるものなら「涙がでるほど嬉しい」宝くじが当たるような予期せぬものなら「跳び上がるほど嬉しい」などと表現を使い分けることもできるはずであるし、そうあってほしいものである。しかし現在の中学生のほとんどは、「ちょう嬉しい」といった表現で済ましてしまう生徒が多い。それは、言葉の世界がより狭くなっていることであるし、また言葉を生み出す心の世界が平面化、単純化していることでもあると感じている。

実際に生徒に俳句を作らせたところ、基本的には、全員が「有季定型」をベースとした俳句が作られていた。(中には、無季俳句の句や字余りの句もあった。)しかしその内容は、例えば「春になり桜が咲いてきれいだな」のような表面的、説明的な作品、また「夜の空見上げてみれば月光る」のようなむだな表現の多い作品が多い。「俳句づくりを通して育む思考力・判断力・表現力等」で示した、4項目の内容が表現された俳句は少なかった。そんな中、上毛新聞に掲載された俳句が一句あった。それは、「木々見るとそっと周りに風がふく」であった。評には、「確かに、木々の周りには常にゆるやかな風が吹いているような気がします。作者の繊細な感覚がうかがわれます。」とあった。確かにこの句には、対象をよく見て気づいた感想(発見)が表現されている。しかし大多数の生徒は、まだ良い俳句とはどのような句なのかの理解が不十分である。これは現時点では当然のことと

受けとめている。

(3) 指導方針

生徒一人一人が、俳句づくりに意欲を喚起し持続させる源となる自分の力で季語を含めた5・7・5の17音を基本とした定型を踏まえた俳句をつくることのできる学習。その句を作る過程で表現したい対象の視点を絞る、用いる言葉を自分のもつ語彙の中から厳選する、仕上げた俳句を見直し修正する力等を育む学習。そのような学習を実現させるためには、課題解決的な学習過程を設定し、生徒一人一人が俳句を作る(一度目の概念形成)活動。個々が創作した俳句を皆で鑑賞し比べ合い、評価し合う中で、他者からの意見や指摘を受けて自作の句を考え直す見方・考え方をまとめる学習。そのまとめを授業者による具体例を基にした説明から、新たな観点から自分の俳句を見直し推敲する(二度目の概念形成)活動を位置づけ、俳句作りの学習に取り組みさせる。

つまり、生徒一人一人が自分の力で、有季定型を基本とする俳句を創作する学習。そして、その俳句を皆で発表し合い比べ合い相互評価する。続いて、皆で交流する中で他者の作品からの感化、他者からの助言から気づき得たことなどを生かして、自分の句を見直す見方・考え方をまとめる。そして、授業者の説明後に、まとめた見方・考え方を基に、自作の俳句を推敲して新たな句に仕上げる。その作り直した句を皆で発表しあい、学習の成果を確認し合える学習過程を組織する。

さらに、有季定型を基本とする俳句作りを常時進めるために、次のような指導を継続的に取り入れて、俳句を通してつきたい力(思考力・判断力・表現力等)の定着と深まりを図る。

○年間を通して、週1回の国語の時間15分程度を使い、学級の全生徒の自作俳句を発表し(名前は伏せて)皆でよいと思う句を選び、授業者の評を加えるなどして俳句作りへの意欲と扱う言葉の仕方と表現の仕方を互いに磨き合う時間と場とする。

○新聞に掲載された作品や入賞した作品は、生徒に作品と選者の評等を配布し、生徒と共に作品の良さを学び合い、創作への意欲と創作の視点、表現力等を育む場とすると共に、事象の受け止め方、想像する力、言語への感性を豊かに育む等の場とする。

以上のような学習過程や学習の場を計画するために、次のような学習の設定・手立てを講じる。
ア、基礎的・基本的な技能の習得を目指した俳句づくりを、生徒一人一人が進めることができるよう、俳句に関わる基本的な事柄を初めに学び、以後学んだことを踏まえて俳句の創作に取り組むことのできる学習計画を設定する。

○「俳句とはどのようなものか」を学習課題として、生徒一人一人が現時点で捉えている俳句についての内容を一つの形として表現する。続いて、生徒個々が創作した俳句を発表し合い、その内容をもとに俳句についてまとめる。さらに、「古池やかわずとびこむ水の音 松尾芭蕉」を示し、有季定型、切れ字、作者が表現しようとした世界(主題)などについて説明し、俳句のきまりや文学としての位置づけなどについて理解を深める。さらに、全国大会や年間優秀句に選ばれた上学年の作品を示し、その作品の優れた点を、「視点の絞り方・想像力・言語感覚・表現力」の4点を中心に解説する。

○上学年の作品例とその優れている点 ※優れている点はいくまで指導者の捉え方である。

- ・寝不足も水面に映す夏の影(視点・表現)
- ・妹の雪だるまには耳がある(視点)
- ・階段を駆け上がっていく夏の風(想像・表現)
- ・踏みしめる私の未来と落ち葉かな(視点・想像)
- ・水たまりだんだん澄んで夏映す(視点・表現)
- ・雷雲が曲がりくねって上り龍(想像・表現)
- ・月光に老いた黒猫さえている(視点・感覚)
- ・じゃり道の猫の背中が春語る(視点)
- ・春風が祖母の病室あたためる(表現)
- ・星空の光集めて霜柱(想像・表現)
- ・里便り母に届くや萩の風(想像・表現)
- ・青空の切れ端探す秋の午後(視点・表現)
- ・受験票まじめな私がおかしくて(視点・表現)

イ、学習過程は、俳句を作ることを課題とする課題解決的な学習過程とする。学習過程の内容は次のようなことを意図し、そのような生徒の姿を具現化するための学習活動を設定し位置づける。

○生徒一人一人が受け身の状態で把握した学習課題を自力で解決するというように俳句づくりを行

うことで、能動的、主体的な学習に生徒自ら転化させること、及び自作の俳句がその後の学習や年間を通した俳句づくりの意欲の源になることを意図して、生徒個々が自力で俳句を創作する個別の学習活動を設定する。ここでは、時間を確保し（年間を通して行う週1回、15分ほどの国語の時間の俳句は家庭での創作が主となる）、生徒一人一人に必ず創作させることが大切である。作品作りに戸惑っている生徒がいれば、適切な指導助言を与え必ず創作させる。

○次に、生徒一人一人が自作俳句を基に他者の俳句を鑑賞し、評価し合うことを通して、俳句を作る場合の視点の絞り方、用いる言葉、想像される世界等、見方・考え方を広げることを意図して、集団（グループ学習）による学習活動の場を位置づける。グループ学習は、3人を基本とする。3人にするのは、互いに自作の句を発表しワークシートに書いてある文字を目で追いながら、耳でも聞いて理解し合える員数であると考えからである。また、互いに目と耳で捉え合うことができることで、3人の句を比べ、他の2人が句を作った友の気持ちを基に、良いところ、改善すべきところなどを、相互評価をし合えることができると考えるからである。

以上のことは、生徒一人一人が俳句を作る見方・考え方の土台を磨きあげることにつながると考えている。

○さらに、集団の学習で指摘されたことや他者の作品を参考にして、自作の俳句に対するまとめた見方・考え方を、授業者の例示した句と説明等による働きかけで、更に新たな視点から見直し推敲する活動の場を設定し、活動の時間を保障する。

ウ、自分の気持ちを言葉で表現できる力を育むために、事象から受け取った感動等を有季定型を基本とした俳句作りの活動を年間を通して位置づける。

○年間を通して週1回国語の時間（15分程度）で、学級全員の自作俳句を提出させ、授業者が名前は伏せてその作品を朗読し、クラスの秀作を選出する。秀作に選ばれた3作程度の作品についての良い点について授業者が評を加えるなどして、聞き取る力の育成と、俳句作りへの意欲と表現力を磨く時間と場とする。

○全員の俳句を、新聞社等に投稿し、新聞に掲載されたり入賞した作品は、選者の評も含めて生徒に配布して作品の良さを確認し、生徒と共に学び合い、さらなる創作の意欲と視点の絞り方、表現力、想像力、言語感覚等を育む場とする。

3. 学習目標

①自分の想いや考え（主題）を5・7・5という言葉を用いて表現するその表現の仕方や、その主題を読み手に想像させる表現の仕方、そしてその主題を他者に読み取れるように5・7・5という音数を活用しての表現の仕方を生徒が自ら身に付けることができる。

②俳句づくりを通して、視点を絞り込み自分の語彙の中から言葉を厳選し読み手を感動させる表現力等を生徒自ら育む中で、有季定型、切れ字等を用いる表現の仕方から言語感覚を自ら育むことができる。

③日々の生活の中で折に触れて自らの心に響いた事柄や事象を17音で表現すると共に、創作した俳句を皆で鑑賞し合い、表現の仕方を互いに高め合う俳句づくりに取り組むことができる。

4. 学習計画（2時間＋毎週の国語の1時間内の15分程度）

ねらい	学習内容・主な活動・手立て	評価規準	時間
1, 俳句ってどんなもの			1
俳句についての理解を深める。 ○俳句は有季定型を原則とすることを確認する。	○生徒一人一人が、俳句に関わる基本的な事項(有季定型・切れ字等)について確認し、俳句の創作を進めることができるよう、生徒一人一人が主体的に俳句創作を進めることのできる条件を揃える。	○有季定型を原則として、作者の表現しようとする世界(主題)を表現した、世界でも最も短い文学作品であることを理解する。	

<p>よい俳句とは、どのような俳句かを理解する。</p>	<p>○「俳句について知っていること」の学習課題からこれからの学びに向けての拠り所をもつことができるよう、俳句について知っていること、俳句についての自分の考えをワークシートに表現できる個別学習の場を設定する。</p> <p>○次に俳句に対する見方、考え方を広めるために皆で考えた内容を発表し、俳句の捉え方を交流し発表した内容をもとに、俳句についてまとめることのできる集団学習の場を設定する。</p> <p>○さらに、松尾芭蕉「古池やかわず飛び込む水の音」から、有季定型、切れ字、主題（古池の周りに漂う静寂）について確認する。また、優れた俳句とはどのような俳句なのかを、上学年の具体的な俳句を通して、視点を絞る力・表現力・想像力・言語感覚の4観点を中心に確認する。</p>	<p>○優れた俳句とは、どのような俳句なのかを、有名な俳句（松尾芭蕉の作品）や上学年の入賞した作品を基に育みたい思考力等の4つの観点より確認できること。</p>	1
<p>2, 俳句をつくらう（本時）</p>			
<p>自作俳句を1句創作し課題解決的な学習を通して、より完成度の高い作品に仕上げる。</p>	<p>☆学習の進め方を学ぶ。（課題解決学習における学び合い学習を通して、俳句づくりを進めることを理解する。）</p> <p>○学習課題「季語（冬を示す言葉）を入れた俳句を作ろう」を提示し、課題を把握させる。</p> <p>○生徒一人一人がワークシートに俳句を考え作品を書くことのできる個別学習の場と時間を保障する。</p> <p>○書いた作品を皆で他者の作品と比べ、相互評価して、作者当人が気づき得なかったこと等の見方・捉え方等のまとめができるよう、集団・グループ学習の場と時間を保障する。まとめは、ワークシートに書かせる。</p> <p>○上学年の生徒作品で、推敲前の作品を提示し、どのように推敲すれば良くなるかを考えさせ、その後説明し、自作の句を書き直す意欲をかき立たせ、推敲する視点の転換を図るきっかけとする。</p> <p>○自分の俳句を新たな視点で見直し推敲して俳句を完成させる。</p> <p>○完成した作品を読み合い改善点を確認し合う。</p>	<p>○季語（冬）を入れた俳句が作れること。</p> <p>○他者の作品を、作者が表現しようとした中心（主題）を基準に読み取り、良い点や改善点等自分の意見が言えること。</p> <p>○他者の意見を参考に、自分の作品を新たな視点で読み自分が表現しようとしたこと（主題）をより効果的に表現するための手立てについて考えることができること。</p> <p>○新たな視点で自分の俳句を読み直し、推敲してより完成度の高い作品とし仕上げるができること。</p>	15分程度
<p>3, 毎週俳句を作って、クラス優秀句を選び、よい俳句のイメージを明確にする。全員の俳句を新聞社に投稿して作品を専門家に評価していただく。</p>			
<p>○印象に残った事象を受けて、毎週俳句を2句以上作る。</p> <p>○授業者の朗読を聞いて、言葉の奥にある世界を4観点を中心に聞き取る。</p>	<p>○学習課題「毎週2句以上の俳句を作り、友達の俳句を聞いて、クラス優秀句を選ぼう」を提示し、生徒一人一人の毎週2句以上俳句を創作する俳句づくりを進める。</p> <p>○生徒が提出した俳句を、作者名を伏せて授業者が朗読し、よいと思った句を一人3句ほど選ぶ。</p>	<p>○日々の生活を振り返る、自分を見つめる、感動したことや新たな発見、自然の事象等について、毎週2句以上の俳句を家庭学習で作ることができること。</p>	15分程度

○皆でクラスの優秀句を選ぶ。	○生徒が優秀句と選んだ句は改めて紹介し、その句の良さを確認する。このような学習を重ねるごとに、各自の表現が練れてくると共に、良い句を選ぶ評価水準が高まって来たことを、事例に即して認め合う場を位置づける。	
○入賞した作品や新聞に掲載された作品の良さを、4観点を中心に理解する。	○新聞に掲載された作品は生徒に配布し、なぜ選ばれたのかを、生徒と共に学び合い創作への意欲と次の創作への示唆になるように進める。	○よい俳句のイメージについて4観点を中心に理解を深めることができること。

5、本時の展開

(1) ねらい

有季定型を原則とした句（季語は冬）を1句作り、その句を基に他者との相互評価を行い、他者からの助言、意見、感想等から気づかされた自作俳句の見方・考え方を基に、自分の表現しようとする世界（主題）をよりよく表現できる見方・考え方を求め、言葉や言葉のつながりを新たに考えて、4観点と結びつけて工夫した表現の俳句に仕上げるができる。

(2) 準備

- 学習課題が記述してあると共に、最初に創作する俳句及びグループ学習後に、まとめが記述でき、推敲後の俳句を記述できるワークシート。
- 学習課題を掲示用として記述した用紙。
- 上学年の生徒が、最初に書いた句と推敲後に仕上げた俳句を記述した用紙。
- 上学年の生徒の推敲後の句のよさ・生徒が視点の転換を図る観点になる言葉を記述した用紙。
- 国語辞典

(3) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点	時間	評価の観点
○学習課題の把握	○学習課題「冬をテーマとした俳句を1句作ろう」 (有季定型を原則として季語は冬)を把握する。	○学習課題が記述してあるワークシートを配布後、学習課題が記述してある用紙を掲示し、皆で確認し学習課題を把握させる。	5分	○学習課題を把握できる。
○有季定型(季語冬)の俳句に個別で取り組み俳句を1句創作	○課題で示された条件の俳句を創作し、ワークシートに記入する。	○学習課題に対して受け身な状態にある生徒を、主体的に取り組む状態にさせるために、生徒一人一人が考え、俳句の創作に取り組む個別の学習を位置づける。 ・俳句作りがなかなか進まない生徒には、季語についての助言と、5・7・5の音数で表現できる支援等を進め、どの生徒にも自作の俳句1句をもたせる。 ・生徒一人一人が考え、自作の俳句をもつことのできる個別学習の場と時間を保障する。 ・本題材の学びや今後の俳句作りへの意欲を喚起させ、持続させうる源となるとともに、学習の中で、生徒が自らの主体をかける対象となる自分で創作した俳句をもたせる。	10分	○条件に沿った俳句を1句創作できる。

<p>○自作俳句を相互評価し合う集団学習 I</p>	<p>○3人のグループで、他者の俳句の良い点や改善点又は疑問に思ったことについて意見を述べ合い、それを基に、各自が自分の俳句を見直す見方・考え方をまとめワークシートにまとめる。</p>	<p>○生徒一人一人が自作の俳句に対する見方・考え方を広げるために、他者の句と比べ合う中で、他者の評価や助言を得ることのできる集団学習である3人のグループによる学び合いの学習を取り入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相互評価は、目と耳で互いの俳句を捉え、比べ合うことができるよう、俳句を書いたワークシートを互いに見せ合い、音読し合って活動できるように言葉がけをする。 ・他者からの評価・感想を踏まえて自らの俳句を作り直す視点を、ワークシートにメモさせ互いに確かめ合わせる。 ・生徒個々が、他者からの助言等を踏まえて自作の俳句の見方をメモし、まとめることのできるグループ学習の場と時間を保障する。 	<p>10分</p>	<p>○他者の俳句を評価するとともに、自作の句についての他者評価を受け入れられる。</p>
<p>○自作の句に対する推敲の方向性を確認する 集団学習 II</p>	<p>○例示された句に対する推敲前と後の句の印象の違いを確認し、自作の句をより完成度の高い俳句とするための表現の工夫を考え求める。</p>	<p>○他者からの意見や感想を受けて、自分の思いをより良く表現できる言葉等を求め考えるきっかけとなるよう、上学年の生徒の俳句（推敲前と後の作品）を掲示し、俳句を推敲する視点を説明し、推敲する見方を与える。</p> <p>※推敲前と推敲後の2句を提示し、——線部がなぜ推敲の余地のある表現なのかを説明し、推敲後の（ ）に入る言葉を考えさせ、推敲後の表現によってどのような効果があるかを理解させる。</p> <p>【推敲前の俳句】</p> <p>①なつかしい京都のみやげ扇子かな ②そばの花地上にあふれた白い花</p> <p>【推敲後の俳句】</p> <p>①京都から（風を持ち出す）扇子かな ②そばの花小さな（希望）地にあふれ</p> <p>※①はどんな表現の工夫をしたらよいかを考えさせ、（風を持ち出す）の表現の効果を確認する。②はそばの花を見たときの作者の思い（明るい前向きな気持ちになった）をどう表現したらよいかを考えさせ、推敲後の表現（希望）の効果を確認する。</p>	<p>20分</p>	<p>○上学年の作品から、自らの俳句を新たな視点から見つめ直す視点の転換を図ることができる。</p>
<p>○自作の句を推敲し完成させる個別学習 ○まとめ</p>	<p>○自作の句とその句で表現したかった思いを見つめ直し、最終的には自分の力で自作俳句を推敲し完成させる。</p>	<p>○推敲するに当たって、見方や言葉が浮かばない生徒には、助言等支援を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自作俳句を見つめ直し推敲する時間と場を保障する。 <p>○完成した作品をグループで発表し合い、互いに作品が良くなった点を認め合うことを促し学習のまとめとする。</p>	<p>5分</p>	<p>○自作の句を基に、より完成度が高いと考える句に仕上げるができる。 ○学習の成果が確認できる。</p>

6 展開の続き（毎週15分の繰り返し学習のあらまし）

学習過程	学習活動	指導上の留意点	時間	評価の観点
○完成した俳句を聞き取り評価する。	○完成した俳句を、授業者の朗読から作品を評価し、上位句を選ぶ。	○作者の氏名は伏せて、授業者が順に朗読していく。生徒は朗読を聞き、良いと思った俳句の作品番号を記録しておき、後で挙手により生徒が選んだ上位句を発表する。 ○全作品を、新聞社等に応募し、作品を評価していただく。	7分	○観点に沿って作品を評価できる。
○4観点の認識を深め次の課題をつかむきっかけとする ○次の課題把握	○新聞に掲載された作品や入賞した作品から、よい俳句についての認識を深める。 ○より高められた次元で俳句づくりに取り組む。	○入賞した作品は、印刷して生徒に配布し、その作品の良さを、4観点を中心に確認していく。生徒が選んだ作品と入賞した作品の違いや一致点を確認することにより、4観点に対する認識を深めさせる。 ○より高められた課題意識で、次の俳句づくりに取り組ませる。 ○どの生徒の俳句も回を重ねるごとにレベルが向上してきていることを常に認めつつ、生徒一人一人がより積極的に俳句づくりに取り組むよう意欲を促す。	8分	○4観点にたいする認識を深めることができる。 ○意欲的に次の俳句づくりに取り組むことができる。

1, 自作俳句を作る。(大きな文字で丁寧に書く。)

2, 自分で気づいた点や、友達の意見・感想から学んだ良い点・改善点をメモしてまとめる。

	改善点	良い点
自分		
友だち		
友だち		

3, どうしたらもっと良い俳句になるか。

①先輩の学習成果から学ぶ。

ア なつかしい京都のみやげ扇子かな ↓ 京都から (扇子かな
イ そばの花地上にあふれた白い花 ↓ そばの花小さな (地にあふれ
気づいたことをメモしておく

②自作俳句の課題となる表現について友だちと意見交換して、推敲する。

4, 完成した俳句を清書する。

5, 推敲前と推敲後の俳句を発表し、学習の成果を確認する。